

巻頭言：特集号

撤退的知性の探究—「撤退学」の確立に向けて

堀 田 新五郎

2020年代の扉は、パンデミックによって開かれた。後世の史家は、我々が生きるこの時代について、斯様な記述から始めるであろう。では、COVID-19によってもたらされた人類のグローバルな災禍は、我々をどのような新世界へと導くことになるのか。巷間、論者たちはさまざまに近未来を語る。「分散型都市」「ヒューマントレーサビリティ」「ニューリアリティ」「職住融合」「コンタクトレステック」「フルーガルイノベーション」「グリーン・ニューディール」…。なるほど、これらが新時代を切り拓くメガトレンドなのかもしれない。だが、こうした「ニューノーマル」を支える人々の思考が、生活世界全般のディープなデジタル化による経済成長や利便性や快適さの追求にあるとすれば、世界には何らの変化も新しさも到来することはない。パンデミックは、既存の潮流をただ加速させるのみである。しかし、その先に待つ未来を楽観視しうるだろうか。格差が拡大し、分断と憎悪が深まり、民主主義的寛容はないがしろにされ、地球環境は致命的なダメージを被りはしないか。人類は今、根本的な態度変更を迫られている。我々はそれを、知の構造転換として提示したい。近代的な「分析的知性」から、「撤退的知性」へのターンである。

本特集号は、「撤退的知性の探究—『撤退学』の確立に向けて」と題された共同研究のスタートとなる。このプロジェクトは、現代世界の枢要な課題、すなわち「持続可能性」に対して新たな視角を提供するものとなる。出発点には、日本の現況に対する危機意識がある。課題先進国といわれる日本は、これまで人類が経験してこなかった諸問題に見舞われている。急速な人口減少、地方消滅、未曾有の財政赤字、年金崩壊、環境激変—これら諸問題は、すべて生活習慣病に似ている。これまでの価値観や生のスタイルを根本的に改めない限り、いずれ破局的な事態が訪れるのではないか。多くの者はそう

不安を抱きつつ、しかし、既存のスタイルを改めることができない。慣性の力学から逃れられないのである。ならば今探究すべきは、慣性や惰性からの「撤退可能性」ではないか。「持続可能性」を唱える人々も、現存するすべてを持続させたいわけではあるまい。大切な事柄を持続させるために、我々はまず撤退することを学ぶべきなのである。

以下、本特集の諸論稿について紹介する。寄稿者多数のため、特集号は二分冊構成となり、本号がVol.1、次々号がVol.2となる。最初に我々の動機や問題意識を伝えるべく一つのマニフェストを提示した。「撤退学宣言—ホモサピエンスよ、その名に値するまであと一歩だ」(堀田新五郎)がそれである。この宣言は【前編：問題編】(本号)と【後編：解決編】(次々号)に分かれ、前編は近代システムが有する「慣性の力学」の強靱さについて考察し、システムからの撤退が倫理的には不可欠であるものの、論理的には不可能であることを明らかにする。後編では、提起されたアポリアの解消を試みたい。

撤退学は「学」としての厳密な体系を志向するものではなく、「撤退的知性」という言葉に触発された人々が自由に参加する運動体を目指す。ゆえに、参加者はマニフェストに全面的に賛同する必要はない。読者もまた、「撤退学」というプロジェクトにご関心があれば、各人のモードでこの運動へとアクセスしていただきたい(文末の撤退学研究ユニットHP参照)。

では、本号と次々号それぞれの論文について、前者は簡潔に、後者はやや詳しく紹介しよう。本号「撤退する都市の創造性に関する一考察——創造都市論の批判的検討から——」(松岡慧祐)は、人口減少と超高齢化が進む中で、都市が撤退する際の複数の可能性について論じている。松岡はまず、創造都市論の系譜と、それに対する批判の論点を整理し、その上で、経済成長や地域活性化のような「神話的言説」からの「撤退」という視点を提示する。焦点となるのは、逃走や撤退から生まれる創造力と、回収や慣性の力学とのせめぎあいに他ならない。

本号「新しい働き方と組織に関する当事者研究ノート—現場から展望する仕事・組織・社会—」は、玉城毅と7人の「起業家的実践者」(田幡祐斤・佐

藤隆・玉城麦野・松井健太郎・山田裕嗣・武井浩三・田原真人)が編んだ、いわば撤退学特集号内の小特集である。その意図するところは、玉城による「序：何故、今、働き方を問うのか?」を参照されたい。働き方をめぐる各人各様の営為は、社会制度が押し付ける「個人化」とは異なった「全体的個人」としての内発的な試行錯誤であり、そこに我々は「撤退的知性」の瞠目すべき実践例を認めるのである。

次々号「近代文明に対抗する撤退学についての批判的考察—持続可能な開発論の再考を手がかりとして」(安村克己)は、近代文明の高度化による地球規模での2つの深刻な問題、環境問題と南北問題(1990年以降、グローバルサウス問題に変容)に焦点を当てる。これらに対処するため、国連は“持続可能な開発(SD)”の理念を提唱し、その後、“持続可能な開発目標(SDGs)”の実践を推進している。しかし、その実際的な効果には、当初から多くの疑問が呈されてきた。その理由として、“持続可能な開発”政策が“近代文明”の本質とその根本的な変革の必要について看過している点が挙げられる。ゆえに、SDやSDGsの欠陥を考察しつつ“近代文明”の本質を抽出し、これとの対比から、“撤退学”による新しい文明構想について検討する。後者が、未来を拓く思想的実践たりうるか否か、これが本稿の中心的な問いである。

次々号「反知性に抗う知のあり方—里見岸雄の思想と行動を中心に(仮)」(林尚之)は、日本社会特有の「場の空気の支配」と、それに埋没しない撤退的知性のあり様を論じている。時代は「バスに乗り遅れるな」が標語となった近衛新体制期の日本である。なぜ日本は無謀な戦争を避けることができなかったのか。近現代史研究にとって普遍的なこの命題はまた、撤退学にとっても枢要なテーマといえよう。「時勢」に流されたあげく破局へと至るプロセスの解明、あるいは「時勢」の力学からの撤退可能性の探究、林はこの命題を、里見岸雄のうちに思索する。里見は「時勢」の内側にいながらも、場の力学に抗う稀有な存在であった。天皇機関説事件後は国体論が猛威をふるい、右翼／左翼、体制／反体制の対立はみられなくなっていく。最後に残されたのが知性／反知性の対立であったと、林は論じるのである。

次々号「社会システムからの個人の『撤退』(仮)」(梅田直美)は、「不登校」

「ひきこもり」「ニート」などの現象に焦点を当てる。これらは、社会システムからの個人の「撤退」として意味づけることができよう。梅田は、こうした現象に対する人々の認識枠組みの形成と転換の過程を明らかにし、近代社会システムが個人の「撤退」を困難にしてきたメカニズムを解明する。今日、オルタナティブな生き方を志向する市民運動やソーシャルビジネスが注目され、各地でネットワーク化が進む一方、大多数の人々は、たとえ辛さを抱えていようとも、競争社会からは降りられない、やめられない、やめようとも思っていない。しかし、これはいったい何故なのだろうか。慣性の力学は、何故これほど強固なのか。本稿の問題関心はこの一点に収斂し、ゆえに、撤退的知性の模索へと反転する。

次々号「学びの共有空間としてのアート—CHISOUはどのように企画されたか？」(西尾美也)は、奈良県立大学が主催する実践型アートマネジメント人材育成事業CHISOUについて、ディレクターである西尾が解説した講演筆録である。アートマネジメントの最終目標は、すべての人が創造的である状態に向けて働きかけることであり、それはすでにあるものを使ってともに自由になろうとする「状況を内破するコミュニケーション行為」によって可能になる。そうして獲得される「学びの共有空間」は、芸術という制度からの「撤退」の成果であることを、さまざまな事例紹介を通じて明らかにする。時の流れは慣性を必然化し、無意識のうちに自己の周囲に檻をめぐらす。それを内破するために、知には「学び」というモメントが不可欠となろう。では、創造的撤退を可能にする「学びの共有空間」とは何か。これを思考することが、西尾論文のライトモチーフに他ならない。

次々号の最後に「撤退学宣言」の【後編：解決編】がおかれる。そこでは、ハイデガー・サルトルらの存在論を参照項に、人間存在の二重性、すなわち「世界-内-存在」であると同時に「世界-外-無」であることの意味が明かされる。人間知性は「世界外」という契機を孕むがゆえに、形而上学的必然性において、自己の状況に埋没することはない。にもかかわらず、なぜ人は慣性の力学に囚われ続けるのか。存在論的考察から始まった本稿は、倫理的探究によって終わる。その際組上に載せるのは、カフカが記した不条理なテー

ぜ、「君と世界との戦いにおいては、世界の側を支援せよ」である。本稿は、これを撤退的知性が要請する倫理命題と見なし、その読解を通して、【前編：問題編】が提示したアポリアの解消を模索したい。

以上、本特集の諸論稿について概観した。ここで論述の対象となったのは、現代の創造都市であり、起業家的実践であり、持続可能な開発論であり、特異な国体論者であり、「不登校」「ひきこもり」「ニート」であり、アートマネジメントの現場であり、ハイデガーやサルトルの存在論である。およそ統一感はない。千差万別という外はない。だが、対象領域の多様性とは対比的に、諸論稿を貫く精神原理はただ一つなのではなからうか。無論、それが撤退的知性であり、我々はこれに導かれて、生のあらゆる場面、あらゆる次元で、慣性の力学からの脱出可能性を模索したのである。

対象領域の無限拡大と指導的知性の唯一性、こうした現象は巨大な精神的転換期に確認しうるものである。音楽における五線譜の誕生、絵画における線遠近法の誕生、数学における解析幾何学の誕生、物理学における機械論的世界観の誕生、医学における解剖学の誕生、政治思想における社会契約説の誕生、そして哲学における cogito の誕生、これらは一見、多様な領域でのバラバラな出来事に見えるかもしれない。だが、これらの現象は、一本の赤い糸によって編み出された同じ世界像の諸アスペクトに他ならない。一本の赤い糸、無論それは分析的知性である。近代化という時代の転換期、世界のあらゆる対象は、知性によって「分析」されることになる。すなわち、「それ以上分けることができないもの (atom / individual)」「それ以上さかのぼることができないもの」にまで対象は解体され、次にそれらアトム同士の機能的な関係性を捉えることで対象の核心が把握・制御されるのである¹。

これが、近代の分析的知性であるならば、そこからの転換を図る撤退学の探究が、生のあらゆる場面、あらゆる次元に及ぶこともまた必然といえよう。様々な場所におかれた風見鶏は、それぞれ回りながら揺れながら、各自ランダムな方角を指し示すように見える。だが時代の転換点、すべての矢印が静止し、その方角がただ一点へと凝集する「瞬間」もまたありうるのではな

いか。おそらくそれは、100年以上継続する「瞬間」ではあろうが。かつて、すべての矢印が示した一点は「分析的知性」であった。未来のそれがどうなるかは、今を生きる我々のあり様にかかっている。

いずれ、航海は始まった。我々は、撤退学という遠大なプロジェクトを開始したのであり、その試みについて大方のご批判を乞う次第である。また、少しでも関心を抱いた方々には、それぞれのモードで本プロジェクトにご参加いただきたい。下記、HPへのアクセスをお願いする次第である。

(奈良県立大学地域創造研究センター

<https://narapu-rcrc.jp/> 撤退学研究ユニット)

注

- 1 近代の「分析的知性」ならびに「自由競争パラダイム」が孕む問題性については、19世紀以降の偉大な思想家が一様に指摘してきた。我々のマニフェスト「撤退学宣言」では、撤退学の視点から、その問題性についてラフスケッチしている。